琉球大学学術リポジトリ

大学院学生の教材開発　―教育系大学院における大学院教育の一つの試み―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
	公開日: 2008-11-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7971

大学院学生の教材開発

― 教育系大学院における大学院教育の一つの試み ―

藤原　幸男*

（1993年6月30日受理）

1990年度より琉球大学大学院教育学研究科が設置され、特色ある授業科目として「教材開発」が設定された。この科目において、私は、教材開発の理論と教材開発事例の講読、教材開発レポートへの取り組み、教材開発発表会での検討、といった内容構成で授業を展開した。本報告では、この内容構成にそって実践報告をした。そのなかで、提出された教材開発レポートをレポートの記述項目にそって検討した。教材の着想には、課題の重要さの認識からの着想、テレビ番組・本などからの着想、生活素材・生活行動からの着想の三つがあること、授業の流れでは、多くのレポートが想像授業記録に挑戦し、多彩な想像授業記録をつくっていること、教材開発に取り組んでの感想では、教材開発者が感動したものを教材にすることの大切さ、アイディアを教材に結実させることの困難さ、授業の流れ、とくに発問・反応を予想することの難しさを指摘していたことなどを述べた。

1　大学院教育学研究科の授業科目「教育実践の研究Ⅰ」

1990年4月より、琉球大学大学院教育学研究科が設置され、大学院教育が開始された。大学院設置申請において、教育学部に設置される大学院の特色として、現職教員を受入れること、カリキュラムにおいて二年次において在職校に勤務しながら授業および指導を受けることができることがあげられた。また、カリキュラムの特色として、附属学校・附属教育実践研究指導センターと協力として、教科教育担当教官のもとで「教材開発」「授業研究」をおこなうことがあげられた。そして、それに対応する授業科目として、「教材開発」2単位、「授業研究」2単位が全専修に設定された。このようなカリキュラム上の特色は、他大学の教育系大学院でも積極的に打ち出している。（佐藤三郎・新井孝喜・樋口直宏「教育系修士大学院における教職教育の理念と展開」、『筑波大学教育学系論集』第17巻第2号を参照）

大学院の設置申請にあたって、学校教育専修においては、「教材開発」「授業研究」の授業科目を教科教育担当教官にゆだねることも考えられたが、現在のところ教科教育専修が不完全であり、一部しか整備されていない（数学教育専修、美術教育専修、技術教育専修、家政教育専修、英語教育専修の五専修）ため、「教材開発」「授業研究」の授業科目は、学校教育専修独自で開講することになった。「教材開発」は教育学教官が担当し、「授業研究」は教育心理学教官が担当することになった。平成2・3年度「学生便覧（琉球大学教育学研究科）」には、「教材開発」の概要として「教材開発の理論と方法について論ずる」とある。担当教官は私（藤原幸男）である。その後、平成4年度（1992年度）に学校教育専修のカリキュラムが改訂され、「教材開発」は「教育実践の研究Ⅰ」と改称された。授業内容の概要は「教育学の視点から教育実践の研究をする」となったが、実質的には、「教材開発」と同じことをやってきている。

以下では、1992年度に実施した「教育実践の研究Ⅰ」をとりあげ、その講義概要と「教材開発」レポートを紹介し、検討したい。

「教育実践の研究Ⅰ」は、年末のあわただし

＊　琉球大学教育学部（教育学科）

い時期だったが、1992年12月25〜28日にかけて、集中講義の形で「教材開発に関する論文と教材開発プラン」を読んだ。それをふまえて、受講者各自で教材開発プランの作成に挑戦し、翌年2月19日までに提出していただいた。そして、3月12日にレポート発表会を開催して、相互交流をはかり、相互検討をした。このように、教材開発についての学習 —— レポート作成 —— 発表・検討といった流れで、「教材実践の研究Ⅰ」講義は展開した。つまり、教材開発の理論と方法を学び、実際に教材開発を体験し、そうしてつくりあげた教材開発プランを相互交流するのである。

なお、受講生は、教育学コースが6名（現職教員院生3名)、心理学コースが4名（うち1名は外国人院生)、障害児教育コースが1名、その他教科教育専修より2名（数学教育専修1名、英語教育専修1名。いずれも現職教員院生）で、合計13名であった。教材開発を中心テーマとして多様な受講学生が集まったことが、討論が活発になり、さまざまな視点から教材開発が検討され、おもしろいものに発展していったことの大きな要因であったといえる。

2　「教材開発」論文と「教材開発」事例の学習

まず、論文を読む前に、講義の約1か月前（1992年11月26日）にNHKテレビで放映され、非常におもしろかったビデオをみんなで見た。これは「『のらねこ』の挑戦」というビデオである。岐阜県の教育困難な工業高校に勤務する物理教師が何とかおもしろい授業をしたいと願って、粗大ゴミなど身近な素材を使っておもしろい実験をし、難しい物理の世界を生き生きと解きあかし、子どもたちから物理への好奇心をひきだし、自分でもできるという自信をつけようとした記録である。といっても、いつでもうまくいくわけではない。三年の二学期で、就職が内定する時期になると、もう授業などそっちのけで、マンガをもちこみ、お喋りをして、授業は成立しなくなる。また、物理においてつねにおもしろい素材があるわけではなく、理論的な話もせざるをえないときもある。そこに苦闘があるのだが、それでもめげず、子どもたちが生き生きとする実験をサークルで共同で開発し、またこうした問題を話しあい、教師として成長していく姿が描かれていて、動機づけにはぴったりだと考え、講義はこのビデオから入っていった。予想どおり好評であった。

そのあと、「教育内容と教材」→「教材づくりの論理と過程」→「教材づくりの評価」という講義内容にそって、次のような論文を読んでいった。

一　「教育内容と教材」
　「新しい教材づくりと授業づくり」（二杉孝司執筆、柴田義松編『授業技術の基礎理論』ぎょうせい、1990年）
二　「教材づくりの論理と過程」
　1　「教材づくりがめざすもの」（藤岡信勝『授業づくりの発想』日本書籍、1989年）
　2　「教材づくりの四つの局面」（同上）
三　「教材づくりの評価」
　「授業と評価」（藤岡信勝執筆、今野喜清ほか『小学校・教科教育法1、教科と授業』日本標準、1981年）

これらの論文は、教材開発研究の現在の成果と到達点を示すものである。「教育内容と教材」の節における「新しい教材づくりと授業づくり」論文は、安井俊夫の中学校社会科授業実践「女は損していないか —— 平等権」を手がかりとして、教材の重要性、教育内容と教材の区別を述べ、さらに住田実「たのしい保健教材の発想」をもとに、教材の二つの条件として<典型性>と<具体性>について述べている。具体的な事例をもとに教材づくりの理論について述べていて、わかりやすく、読者に納得性をあたえる好論文である。

「教材づくりの論理と過程」の節では、「教材づくりがめざすもの」は、仮説実験授業風の具体的な事例をもとに「教材の規定」を述べていて、読者に説得力がある論文である。この叙述をふまえて、「教材づくりの四つの局面」に

おいて、「課題の成立」→「教育内容研究」→「教材化」→「実験授業」、といった教材づくりの過程について説明している。同論文では、四つの局面を説明したあとで、「文字と人間」の教材づくりの場合、「検地」の教材づくりの場合をとりあげて、いずれもこの四つの局面があてはまることを述べている。わかりやすい論文である。

「授業づくりの評価」の節における「授業と評価」論文では、教材の形式として(A)「問題」、(B)「お話」、(C)「視聴覚教具」「実物教具」、(D)「ゲーム、クイズ、ものづくり」などの「学習形態」をあげ、授業の評価として、授業中の子どもの発言や反応、授業についての感想文、選択肢型のアンケートなどの評価方法について具体的に論じている。これも具体的で、イメージがわきやすい好論文である。

以上の論文を輪読し、ところどころ立ち止まって討論した。現職教員院生の方から、実際の教職経験をふまえた活発な感想・意見がでて、授業の雰囲気がだんだんともりあがっていった。

以上の論文の学習によって「教育内容」を「教材化」することの意義と方法をイメージ化し、そのうえで、教材開発の事例を紹介した。事例として取り上げたのは、次のものである。いずれも、具体性と意外性をもったもので、おもしろく読むことができた。とくに、村上呂理論文、工藤信司論文は地元・沖縄のことを扱った教材開発事例なので、受講学生の興味・関心を大きく引いたようである。

一　村上呂理「小さい日本、大きい琉球」(『授業づくりネットワーク、増刊、地域教材の開発と授業①』学事出版、1990年11月)
二　工藤信司「『一枚の写真』で『あたたかい地方のくらし』を」(『授業づくりネットワーク、増刊、地域教材の開発と授業②』学事出版、1991年11月)
三　田口喜義「福沢諭吉は、主戦派？反戦派？」(『授業づくりネットワーク』1992年8月号)

講義の部分を終えたあと、「感想」を受講学生に書いてもらった。おおむね、好評であった。そのうちのいつくかを紹介しておきたい。

「その試みから察するに、現在行われている教材開発とは、それを押し進めようとする者は理想主義者であり、教材そのものに至っては、今日の学校教育に対してのささやかな、それでいて力強い抵抗であるように思われる。」(一般学生院生)

「私は、教師が専門職と言えるのは、単に教えるだけでなく、教えるための『教材』をつくるプロだからであると考える。最近では、様々な業者が興味深い『教材(のようなもの)』を市販している。教師はそのような業者に『教材づくりのプロ職』を譲ってはならない。これからの教師は、教材づくりのプロを目指そう。そうすれば、児童・生徒の心も自ずとつかめてくるだろう。」(一般学生院生)

「これからは、教科書(教育内容)の精選や『わかりやすく』て『魅力』のある教材づくりに一層のエネルギーを傾注しなければならないであろうと考えます。『教師は授業で勝負する』といいますが、基本的には『教材』間の『競い合い』(教材研究)という、教師の本来がクローズアップされてくるということなんですね。」(現職教員院生)

「教材づくりは授業づくりだと言える。教材の善し悪しは大きく授業の善し悪しを左右するものである。いくつかの事例はとても参考になった。また教材づくりがこんなにも“うきうき”するものであることをそれらの事例は教えてくれた。また教材の要素が、私たちのまわりにたくさんころがっていることも強く感じさせられた。特に、工藤信司氏の『一枚の写真』で『あたたかい地方のくらしを』という教材は読んでいて“どきどき”するものがあった。教材づくりは基本的には私たち教師が“どきどき”するかという“皮膚感覚”的なところも大事なことかもしれない。」(現職教員院生)

「毎日関わっている『教材』でありながらその概念理解や評価基準が非常にあいまいであったことを講義をとおして反省させられた。教材、

教育内容、学習資料、素材などのキーワードを押さえ、整理すると、漠然としていた教材観が少しずつ明確になっていった。これまで教科書は教材そのものであると思っていたので、教科書イコール教材ではないという捉え方は驚きだった。しかし、授業の成否に関わって、『あるがまま』の教材が『あるべき』教材として機能しているかという視点から教材をみていくと、教科書がそのまま教材とはなりえないことが理解できる。良い教材とは、生徒の内面を揺さぶり、知的好奇心や知識欲をひき出し、発見する喜びを与えるものだということが、示された教材例によりよく理解できた。そのような教材をみていると、生徒たちの生き生きとした表情が目に浮かぶようである。」(現職教員院生)

「現場的発想で少し言わせてもらうならば、現実的に教材研究の時間がなかなか捻出できない悩みがあることは否めない。学校全体として、あるいは学年として週に一時間くらいのものではないか。……そのような多忙さが、知らず知らずの内に、『典型性』『具体性』『意外性』という発想を生みだす機会を失わせ、教科書中心の授業というよりはむしろ“教科書に頼った授業”にしてしまったような気がするのである。」(現職教員院生)

「社会的行為として意識した教材づくりを行うには、ビデオで見た『のらねこ学会』のような学習会が絶好の機会だと思う。各自がつくった教材を持ち寄り検討することで『どこでも誰でも使える』教材づくりも進むだろうし、また他の教師に鼓舞されて各人教材に対する意欲が新たに沸くだろう。この意欲が一番根っこになる大事なものなのではないだろうか。」(一般学生院生)

3 「教材開発」レポートの作成

(1) レポート要領と提出されたレポートについて

「教育実践の研究Ⅰ」講義開始のときの講義要項プリントで、「教材開発」レポートについて述べておいた。それは、次のような形であった。

課題　自分でテーマを設定して、教材開発プランを作成せよ。
レポートの書き方

〇〇〇〇(タイトル)
学生番号　　氏名
1　教材を着想するまで
2　本プランにおける教育内容と教材
3　授業の流れ
発問・課題・作業、資料、予想される子どもの反応などを明記すること
4　教材開発にとりくんで(感想)
5　参考にした文献・資料

枚数　ワープロ用紙(40字×30行)8枚(400字用紙換算で24枚)
締切　1993年2月19日(金)

テーマについては、自由とした。自分の担当教科に関して教材を開発してもよいし、それにこだわらないで身近な話題をとりあげて教材開発してもよい、とした。

レポートの書き方については、すでに教材づくりの過程について学んでいるので、その過程にそって記述してもらうことにした。まず、教材を着想するまでの過程について記述する。何がきっかけでこの素材を教材化しようと思ったのか、について実際の試みをもとに書く。講義において重要なポイントの一つは、教育内容と教材の区別なので、教育内容と教材を意識し、何が教育内容で、それをどういう教材で教えようとしたかを書く。それを、実際の授業を想定して、授業の流れを書く。このような手順でレポートを書くことを求めた。

枚数は、少し多いが、400字詰換算24枚にした。これまでの経験で、授業の流れや資料を入れると、どうしてもそれくらいの枚数が必要であるためである。

締切期日は、成績評価の提出期限を考えて、翌年2月19日締切とした。これがぎりぎりの期限である。学生にとっては、正味1か月半のとりくみである。

上記のようにレポート要領を示したが、それだけではイメージがつかめないと思って、昨年度のレポート例を三つほど紹介した。昨年度のレポート例を一緒に読んで、こんな感じで書けばよい、というイメージがつかめたようである。

レポートは全員提出した。提出されたレポートは、以下にあげるものである（執筆者名については、仮名とした）

エイズと在る私たち	I・K
私たちの生活と食糧	K・M
自分を見つけよう	S・K
「ネコ」缶来るまで三千里	T・M
人は何を求めているのか	H・H
お茶と中国人	T・J
水の値段	N・M
買物の仕方	F・M
辞書の引き方	Y・M
敬老の日にむけて ―グランドゴルフをしよう―	Y・H
再生紙は高いか！？	Y・T
数列の和	M・T
MAP	M・N

これをみると、まず、テーマが多彩であることに気づく。とくに、環境問題、人類的課題など社会科教育的問題にとりくんでいるレポートが5つある。身近な題材のなかから、現代社会において今を生きる子ども・青年に考えてもらいたい教育内容を掘り起こしていることである。それ以外に、国語科教育、数学科教育、英語科教育、障害児教育、家庭科教育に関する教材開発のレポートがある。このようにテーマが多彩であるのは、教科を限定せずに教材開発を指示したこと、さまざまな教科の担当者が集まっていることが理由としてあげられる。

今回のレポートでは、自分の専門教科に関して教材開発を試みているレポートが比較的すくない。「辞書の引き方」「敬老の日に向けて ―グランドゴルフをしよう ―」「数列の和」「MAP」の、4つほどである。教育学・心理学らしいテーマとしては、「人は何を求めているか」があげられる。自分の専門教科以外での教材開発が意外に多かったが、その理由として、一つには、「教材開発」論文と「教材開発」事例の学習において、比較的環境問題・人類的課題を扱った事例が多かったこと、二つには、専門教科にこだわらず、しろうとらしい新鮮な目で環境問題・人類的課題などの諸問題をみつめ、そこから教材化に挑戦していっていることがあげられる。理科教育・技術教育や国語科教育を本来専攻している人が現代社会に関わる問題についての教材開発、どちらかといえば社会科的な教材の開発に挑戦し、おもしろい教材の開発に成功している。しろうとらしい新鮮な目で見ることの良さが現れている。自分の専門を離れて、自由な着想で教材を考え、教材開発に取り組んでいくのも、意外に教材開発の力量を高めることになるように思われる。以下では、レポートの記述項目にそってレポートの内容をみていきたい。

(2) レポートの内容について

① 教材を着想するまで

教材の着想の仕方には、さまざまなタイプがある。一つには、課題の重大さを認識して、教材開発の困難さを覚悟して取り組んだものである。たとえば、エイズの教材開発にとりくんだレポートがある。

「たとえそれが対岸の火事であるにせよ、エイズについて考える必要があるのではなかろうか。これほどまでにエイズが広がりをみせた背景には、その病に対する情報が不足していたということがあげられる。しかもそれは簡単な方法によって避けることができるのである。したがって知識の普及、しかも学校教育における教師の役割は非常に重要である。…エイズは性病としての側面をもつ。それはセックスを媒介として感染する。したがって学校教育の現場においては、これまでには知らない振りをして過ごすことが許されてきたことにも、敢えて触れなければならないことであろう。教材開発にあたっても多くの困難が予想されるが、もはや避けて通ることも許されまい。」（「エイズと在る私たち」）

二つには、同じく課題の重大さを認識して、日頃からこの問題に関心をもってみているが、直接には、テレビでの番組や資料がきっかけとなっているものがある。

「食糧難、あるいは食糧危機という人類的規模の危機的な言葉が使われだして10年以上が過ぎる。しかし日本にはまるで関係がないかのようにわたしたちは豊かすぎる食生活を送っている。このような日本の豊かな生活はいったい何に支えられているのだろうか。日本だけで食糧はまかなえているのか。またいつまでも続くのか。不安はつきない。このような疑問に答えるかのように先日、NHKスペシャル"新日本人の条件、「飽食は喜びですか」"が放映された。今回はこのテレビ番組を『わたしたちの生活と食糧』というタイトルで教材化を進め、食糧問題をみんなで考えてみたい。」(「わたしたちの生活と食糧」)

「以前に私は、学年最後の授業参観日を利用して親子合同の授業を計画したことがある。何よりも小学校を卒業するこの子どもたちが中学生になっても自分を大切にしていきたいと思う気持ちが持てるような内容にしたいと思っていた。また授業を参観する父母にも自分の子を再発見してほしいという意味合いを含めたかった。そこで思いついたのが『母体の中で、へその緒でつながれながら約270日間成長しつづける胎児の姿」であった。私はこの姿をスライドをとおして子どもたちに見せてやろうと思った。……その後わたしは、NHKテレビの特集『驚異の小宇宙人体』に出会った。生命の尊さ、神秘さをいやがおうにも感じさせると同時に、深める内容を含んでいた。つまり、『胎児の姿』だけの授業では主に母子の絆を深めることをねらったもの以上の授業展開はあまりのぞめない。しかし『驚異の小宇宙』においては、多くの卵細胞から選りすぐられたたった一個の卵子と、3億の精子の中から選りすぐられたたった一個の精子だけが生命の始まりである受精卵となることが、映像で紹介される。これは、生命をうけたこと自体、偉大なことであり、神秘的なことであることを感じさせ、子どもたち一人一人が、自分自身をかけがえのない存在として感じることができるだろうと思った。」(「自分をみつけよう」)

「グローバル教育は社会科教育に限らず全教科および教科外教育において可能である、また実践されなければならない。私は理科の教員免許をもっているので、理科では何ができるかと考えた。いろいろ考え…たがおもしろい題材がみつからず断念。以前に読んでおもしろかった、南北問題の一つを示す内容の本をもとに授業を考えてみた。テキストは『アジアを食べるネコ』という本で、主役は猫用ペットフードの缶詰、略して『ネコ缶』である。猫を飼つている家庭は多く、その餌はペットフードを与えていることが多い。身近なものが日本と世界との結びつきの産物という、具体性と意外性をもった教材といえ、また授業の動機にぴったりあう。」(「『ネコ』缶来るまで三千里)」

三つには、生活の身近な素材や生活活動から教材を思い浮かび、教育内容とむすびつけて教材開発をしたものである。

「私は、スーパーへ買い物をしに行くのが好きだ。特に、生鮮食品の買い物をするときには、それを見ているだけで面白い。……ある日、牛肉が陳列されている場所でどれを選ぼうかなやんでいたとき、『買い物』を教材化しようという考えが頭に浮かんだ。私自身、買い物上手とは言えないが、以前よりは、ものの選び方が上達しているような気がする。私の買い物の仕方が上達した理由の一つは、値段の安さだけにとらわれず、量や製造年月日(または、調整日)、保存方法などにも注意を向けるようになったことである。値段の安さだけに気をとらわれて、量の多さを考えない買い物は、決して上手な買い物とは言えないだろう。また、値段の安い食品を多く買い込んでおくという方法も、ときには、『下手な買い物』につながることもある。特に、『生もの』の場合、保存方法をきちんと理解していないと、最悪の場合、残りの物を全部腐せてしまうことになる。そうなると、買った時点では経済的な買い物でも、結果的には不経済な買い物になる。……そこで、私は、(品

物の選び方の基準として）値段、量、製造年月日（または、調整日）の３つの基準をとりあげたい。これらの基準は、多くのスーパーで使われているものであり、ジスマークなどの品質表示よりも身近なものと考えた。」（「買い物の仕方」）

「（『久米島の久米仙』（泡盛）工場を見にいって、原料としてタイ米を使用していること、ハブ酒のハブはほとんど中国からの輸入に頼っていること、一升瓶のリサイクルなどがネタとして使えそうに思った）。しかし、私を本教材づくりに強く動機づけたのは、友人のゴミや省資源に対する意識だった。思いつくままに列挙すると、毎日でる生ゴミを土にうめ肥料として使う。ティッシュペーパーは余すところなく使ったうえで捨てる。アルミホイル・ラップ・ビニール袋は、洗って乾かし最大限に利用する。ご飯は残さない。など、徹底して習慣化している。当然ゴミは分類されていた。それも牛乳パックまでだ。友人のこの生き方に触れることで、私は、自分がむやみにゴミを出している張本人であることを自覚させられた。またゴミ問題と省資源・リサイクルは、私たち一人一人の意識にかかっていることを再認識させられた。ゴミを取り巻く問題は深刻だ。そして、ゴミを生かすも殺すも私たちの心がけ次第である。私はゴミ問題をぜひ教材として扱いたいと考えた。」（「再生紙は高いか!?」）

「中国人が日本人の学生になにを教えることができるのか？中国人だから中国語を教える？しかし、中国語の発音記号を全部教えるだけでも最低三時間かかる（それも早いスピードで）。ただ一回の授業で何ができるのか。発音さえも教えきれないのは事実であるし、授業の内容が難しすぎておもしろくないのも予見できる。それに、言葉よりも日本人の日常生活の中から、中国人と深い関係を持っている話題を授業の内容にしたほうが子どもたちも理解しやすいし、おもしろく感じてくれるだろう。しかしそう思いながらも、適当なテーマはなかなか出てこない。自分を追い詰めても仕方がないかと思って、暫く休んでお茶を飲もうかと。そして、お湯を沸かして、台湾から持ってきた私が大好きなウーロン茶のコマーシャルがでてきた。『一級茶葉限定使用』を見たとき、まず頭の中に浮かんできたのは『本当？』、そして『本当だったら、もったいないなー』という考えだった。なぜかというと、中国人にとって、本当の高級なウーロン茶は熱いうちに飲むのが一番そのお茶の香りや味を楽しむことができるから、缶ウーロン茶にしたら、あまりにももったいなさすぎるのである。そうだ！これだ！中国で二千年の歴史を持っている飲み物で、この何年間ですでに日本人の好きな飲み物になっているウーロン茶をテーマにすれば、結構おもしろい授業ができるのではないかとふっと思った。」（「お茶と中国人」）

しかし、これらの方法・きっかけによる教材発見はすぐにできたわけではない。試行錯誤の過程を含み、当初のアイディアが資料（ネタ）不足で挫折したり、消滅したりした人もたくさんいる。時間をかけて、このような試行錯誤の過程を繰り返しながら、ある日、あるふとしたことがきっかけで「発明」されるのが、「教材」なのである。

② 本プランにおける教育内容と教材

この箇所は、「①教材を着想するまで」と重なるところが多い。しかし改めて教育内容と教材を意識することによって、教材づくりは明確になるので、教育内容と教材を記述することは意味があると考えられる。では、レポートにおいてはどうかを見てみたい。

レポートにおいて、「教育内容」だけを細かく記述しているものが多かった。レポート作成者は、流れとして、「①教材を着想するまで」において教材について述べたので、この節では「教育内容」について述べればよい、と受け取ったのかもしれない。しかし、レポートのなかには、教育内容と教材の個々について記述し、両者の関係を記述しているものもいくつかあった。以下で紹介したい。

「私たちの生活と食糧」レポートでは、教育内容として「食糧とわたしたちの生活」とし、教材として「タイのディムラン・カゼムさんの

玉ねぎの生産」を取り上げている。教材について、そこではテレビ放映場面を写真撮影してスライド化し、スライドによる視聴覚教材の提示をしている。

「自分を見つけよう」レポートでは、①「数百万の卵細胞から一つの細胞だけが卵子になること」「三億の精子から一つの精子だけが新しい生命のもとになること」を示す映像教材（「驚異の小宇宙人体」）によって、「生命の尊さ」「自分のかけがえのない存在」（教育内容）を認識させる、②「270日間へその緒で母体と結ばれた胎児の姿」を示すスライド教材をとおして、「これまで温かく見守ってくれた両親への感謝の気持ちを育てる」ことを目標としている。ただし、後者については、すぐ感謝の念に向かうのではなく、両親が温かく見守っていることを認識させることこそが大切であり、まずは、教育内容としてはこのことに精力を傾けるが大切のように思われる。だが、全体としては、適切な組み立てとなっているといってよい。

「買い物の仕方」レポートでは、「値段、量（グラム）、調整日を手がかりとして、上手な買い物の仕方を理解すること」を「教育内容」としている。明快である。

「ＭＡＰ」レポートでは、「ア　プリント（地図と英語表現を書いたもの）、イ　日本製の世界地図、英国製の世界地図、ウ　クイズのための問題カード」を教材として、「ア　地図を読み、位置や方角についての表現を学び、それを使って対話する」「イ　アの活動を通して地図の役割機能を理解し、更に、世界の中心に位置する国はないのだということを認識する」ことを教育内容としている。とくに「英国製の世界地図」を使ったことが、本物性に由来する興味・関心を子どもから引きだすことに大きく貢献している。それと関連して、「教育内容」としての「世界の中心に位置する国はないのだということ」は、子どもたちに地図認識における意外性をもたらし、認識の変革を呼び起こす点で、すぐれているといえる。

③　授業の流れ

レポートの書き方では、「発問・課題・作業、資料、予想される子どもの反応などを明記すること」としてあったが、でてきたレポートをみると、13レポート中８レポートが想像授業記録の形で書いてきている。想像記録というのは、実際の授業場面を想像して教師と子どもとの問答の形で仮想授業記録を書くというものである。ふつうは指導案という形で、発問・課題・作業、予想される子どもの反応をそれぞれ欄を設けて記述するのだが、それでは、授業の様子がダイナミックに見えてこない。そこで、昨年度の提出レポートのうちで、教師と生徒との問答を予想して、想像授業記録をつくり、それでこの項目を記述しているものがあった。おそらくそれを模倣して、多くの人は想像授業記録で書いたのだろう。レポートにおける想像授業記録をあげてみよう。

Ｔ20　「さあ話をネコ缶に戻すよ。インドネシアやフィリピンでとられたマグロの多くは、冷凍してタイに輸出される。最初にいったように日本は輸入ネコ缶のほとんどをタイから輸入している。なぜだと思う？」

Ｓ12　「安くできるから」「缶詰にする技術が進んでいるから」

Ｔ21　「タイに缶詰工場ができ始めたのは十数年前で、ツナ工場が盛んになったのはここ７、８年のこと。とくに技術が進んでいるわけじゃない。タイの缶詰産業の利点は、労働力が多いこと、生産コストが安いこと、労働力の質がいいこと、の，３つなんだ。この３つの中で一番の利点は何だと思う？」

Ｓ13　「正解は、労働力が多いこと。日本でツナ缶詰をやめる工場が増えたのは、労働力不足が一番大きな原因なんだ。プリントを見たらわかるけど、ツナ工場では人の手でやる作業が大変なんやね。マグロを解体して、うろこや内臓を取り除いたり、プリントには書いてないけど缶を開けたとき見栄えがいいように、肉を缶に詰める作業も機械ではなく人がやることが多い。だから言い換えたら、日本人が面倒でやりたくないことをタイの人にさせている、といえるんじゃないかな。まあこのこともみんな考えてみて。」

（「『ネコ缶』来るまで三千里」）

上記の想像授業記録では、教師が問いを投げかけ、それに子どもが答えるという形式である。教師は子どもの答えに応えて、プリントなどをもとにして説明する。そうして、当初想定した教育内容を子どもに伝えていく。――という論法である。これは、従来の指導案での形式よりはわかりやすいものの、全体的に説明的である。それに対して、子どもからの問いを組み込んで展開していった想像授業記録もある。それを次にあげよう。

Ｔ１：みなさん、今日の授業はこれについてやります。（缶のウーロン茶をみせる）

Ｓ１：えー、先生、それ、缶のウーロン茶じゃないか。みんなに１本ずつくれるの？どの会社のが一番おいしいかという試食会でもやるの？

Ｔ２：いいえ、全然ちがいますよ。みなさんも知っているでしょう、先生は台湾出身です。初めて日本にきて、缶のウーロン茶をみたとき、とてもびっくりしました。なぜだと思う？

Ｓ２：「台湾には自動販売機がない」「台湾の人はウーロン茶を飲まない」「台湾には缶のウーロン茶はない」

Ｔ３：そう、そのとき、台湾はまだ缶のウーロン茶がなかったんです。そして、ほとんどの中国人は熱いお茶しか飲みませんが、日本人はかえって冷したウーロン茶の方が好きなようです。

Ｓ３：えー、私たちが当たり前のように思っていたことは、中国人にとっては不思議なことなんだ。じゃ、中国人はウーロン茶をどういう方法で飲んでいるの？

Ｔ４：いい質問をするんですね。これはつまり、今日の授業の内容の一部です。きょうは「お茶と中国人」について勉強したいと思います。

（下線に注意。「お茶と中国人」）

Ｔ：「ここに、シールが３枚あるけど、それぞれちがうね。このシールが牛肉にはられているとしたら、みんなは３つのうちどれを選ぶかな？」

Ｃ：「私は一番安い牛肉を選びます。」

「ぼくは、一番量が多い牛肉を選びます。」

「私は、一番新しいものを選びます。」（それぞれ好みがちがうようである。それぞれの子どもが値段、量、加工日を考えて選んでいるが、３つすべてを計算にいれているか疑問が残ったので、選んだ理由も聞いてみた。）

Ｔ：「じゃあ、選んだ理由を言ってほしいんだけど、まず、一番安い牛肉を選んだ人から理由を言ってください。」

Ｃ：「はい、私が一番安い牛肉を選んだのは、お金の節約のためです。」

Ｔ：「ありがとう。そうだね、お金のムダ遣いはいけないからね。じゃあ、次は、一番量の多い牛肉を選んだ人、その理由を言ってください。」

Ｃ：「はい、たくさん牛肉を食べたかったからです。」

（この瞬間、子どもたちがどっと笑った。）Ｔ：「それもそうだね。先生もできるだけたくさん食べたいよ。それじゃ、最後に、一番新しい牛肉を選んだ人に、理由を言ってもらいます。」

Ｃ：「はい、私は、新鮮なものを買えば牛肉をおいしく食べられると思って、一番新しいものを選びました。」

Ｔ：「そうだね。いま○○さんが言ったことは、牛肉だけでなく、他の食べ物でも同じだね。ありがとう。座っていいですよ。」

Ｃ：「でも、せんせい、どうせ買うなら、安くて、量が多くて、新しい牛肉を買った方が得するんじゃないですか？」

（私は、この発言を待っていた。）

Ｔ：「そうだね。いいことに気がついたね。」

（下線に注意。「買い物の仕方」）

上記の下線のように、子どもから核心的な問いを引き出し、それを基軸にして授業を展開しようとしていることに注目したい。このような問答像こそが求められているように思う。それと、上記授業記録で注目したいのは、このような子どもからの問いに対して、教師は「いい質問をするんですね。」「そうだね。いいことに気がついたね。」と応対していることである。このような評価の仕方によって、子どもは認められたと感じ、安心感をもつのである。このような授業での応対技術が大切だといえよう。想像授業記録によって、そのレベルでの教師の応対が問題になってくるのである。

その他、想像授業記録で注目すべきことについてあげると、一つは、資料の処理の仕方である。資料をそのまま使うのではなく、教育学的に加工して使っているレポートがあったことである。たとえば、関係者へのインタビューという形をとって、資料を処理しているものがある。語り口調で、臨場感がある。次のものは、その一例である。

T：ヨーロッパでの話だけど、ヨーロッパの水道の水は直接飲むのはほとんどありません。飲み水は、お金を払って飲むものだと思っています。それは、水の質があまり上等ではないからです。もしかしたら日本の水も悪くなっているのかな？

次の水道の水をつくっている人の声を聞いてみてください。

― 浄水場のおじさんの話 ―

最近は、水がくさいし、おいしくないって苦情が多いんだよね。でも水道のもとになる水がだんだん汚れてきて、安全で飲める水にするには、消毒する塩素っていうのをたくさんいれないといけないんだよ。でも塩素を入れすぎると、水はくさくなるし、おいしくなくなるんだよ。しかし、別の方法でやれば、今の状態の水がおいしく安全になるんだよ。でもこの方法を使うと、値段が高くなるんで、また文句がでちゃうんだ。みんな勝手だよね。水道のもとの水を汚してまずくしているのはみんななのに。

（「水の値段」）

二つには、班活動を取り入れ、班発表・班発言を入れて、授業記録をつくっているレポートがあることである。授業形態を視野にいれての想像授業記録の出現である。このような試みをもっと追究する必要があるように思われる。

T：ディムランさんは去年8300トンの玉ねぎを日本に売りましたが、今年は日本はその1／3しか買ってくれないのです。それはなぜでしょう。また班で話し合いをしてみてください。ヒントはこのスライドにあります。これは日本の会社が玉ねぎを買うときの玉ねぎの規格を定めたものです。

―といってスライド③を投影。生徒はスライドを見ながら話し合う。―

5班：たぶん日本の会社はおととしは7㎝のものを買ったのに、去年は9㎝、今年は8㎝と毎年規格がちがうのでディムランさんがわかりにくくてつくれない。

6班：でも去年のものは7㎝の穴も、また9㎝・8㎝の穴も2つあいているのはなぜだろう。

1班：去年のものに注目すると7㎝と9㎝ということだから、すくなくとも10㎝とか12㎝というような大きな玉ねぎは日本の会社は買わないということだよ。

3班：わかった。おととしは7㎝以上の玉ねぎを買ったのに、去年は7㎝以上9㎝以下の玉ねぎ、今年は7㎝以上8㎝以下の玉ねぎしか日本の会社は買ってくれないんだよ。

2班：つまり、毎年、日本の会社が買う玉ねぎの規格が厳しくなっているということだよ。

全員：あ～そうかあ。

T：よくそこまで気がつきましたね、感心感心。でもそれだけではありません。

（「食糧とわたしたちの生活」）

④　教材開発に取り組んで（感想）

最後に、「教材開発に取り組んで（感想）」についてだが、大きくは、「教師が感動するネタを」ということ、「アイデアから教材化までの難しさ」、「発問、子どもの反応を予想することの難しさ」に分別することができる。このうち、「発問、子どもの反応を予想することの難しさ」は、一般学生院生に多かった。一般的にいって、一般学院生はおもしろい題材（ネタ）に着目し、ユニークな教材開発をするのだが、授業展開の構想は苦手である。授業展開の構想においては、やはり、子どもと接し、そのなかで発問・子どもの反応を予想することに慣れることが大切なのかもしれない。

ア　教師が感動する教材（ネタ）を教材開発することが大切である

「教材開発に大事なものはやはりネタだと感じる。それも教師自身が感動するようなものでなくてはならないと思う。この教材はＮＨＫテレビの番組を教材化したものである。この番組を見てわたし自身感動し、絶対子どもたちにも

教えなくてはいけないことだと強く感じた。そんなわけで<授業の流れ>ではちからが入ってしまった。」（「わたしたちの生活と食糧」）

「教材は、児童に与える前にまず教師が感動する内容を含んでいるかということも大切ではないかと思う。そういう意味で自分の感動した体験を児童にどう与え、どう感動を体験させるかという視点で教材開発を進めてみたわけだが、なかなか実際に取り組んでみると時間がかかるなという感じである。」

（「わたしたちの生活と食糧」）

「予想通りに難しかった。自分の国を人に紹介したいとき、本当に自分が自分の国のことを何もわかっていないことを改めて痛感した。だから、自分の国を知ることに一番効果のある学習法は自分がもっと知りたいことを人に教える方法であろうとつくづく実感した。」

（「お茶と中国人」）

イ　アイデアを教材に結実させることの難しさを感じた

「いくつかの教材化を考えていたけれど、なかなかできなかった。一つ例であるが、日本のトキが絶滅するのを待つだけである。このトキは、人類が絶滅に追い込んだのである。トキはもうお金では解決できる問題ではないのである。そのようなことを教材化して、最後に少し皮肉も入っているが、ときは金なりと閉めるのはどうかなと一つ思ったが、結構資料がないものである。」（「水の値段」）

「国語が専門なので、当初は『伊藤園』のウーロン茶缶に記載された俳句大賞（ベートーベンにらんでばかりで恐ろしい等）の俳句や外国語の俳句を素材に、従来の伝統的な俳句鑑賞にとどまらない、『俳句ってなに？』という教材を考えていたが、私の手にあまるものだった。ネタはいろんなところに転がっているのに、それを十分生かす教材のレベルに引き上げる段階で、いくつかの発想が泡となり消えていった。」

（「再生紙は高いか!?」）

ウ　授業の流れ、とくに発問・子どもの反応を予想することが難しかった

「……疲れた。教材は現在の沖縄の抱えている問題を取り上げている点で、生徒の興味を引きつけることはできると思うが、授業の展開がうまく考えられなかった。なによりも生徒がどう反応するかの予想がうまくできず、一人よがりの授業計画になってしまった気がする。（教員になったらたいへんだな…）。」（「人は何を求めているか」）

「『アジアを食べるネコ』という題材をそのおもしろさで選んだものの、展開が平板で教師の講義一辺倒の授業にしてしまった。」（「『ネコ缶』来るまで三千里」）

「なにかお説教臭くなって終わってしまったような気がする。そして、教師の一方的な進め方で、子どもに考えさせるところがなかったように思う。授業のなかに討論や班活動を入れるといいのかもしれない。単調な応答形式で、薄っぺらな授業になってしまった。」（「水の値段」）